

全国博物館週間

—— 動物園と博物館 ——

技術係長 渡辺 敏雄



毎年10月の第2週（今年は8日から14日まで）を博物館週間と定められています。この週間は施設をよく知っていただき、そして大いに利用していただこうという普及週間なのです。

昔から博物館といえば、古文書や骨董品の保存してあるところというイメージが強く、時代ズレた物など「博物館行」といった冗談を聞くことがあります。然し現在は科学技術のめざましい発展とともに、社会教育施設の重要性が叫ばれ、各地に多種多様の施設が設置されています。

では博物館とは何か？動物園とどのような関係があるのか？簡単に述べます。

1867年（慶応3年）パリで開催された第5回万国博覧会に、幕府が派遣した代表団の一員がフランスの博物館や動植物園を調査し、約200点の資料を持って帰り、有志者に公開しました。このことが日本の近代的博物館の基礎となる動機になりました。

然しその後、博物館について明確な体系がなされないうままずっと年月を経てきました。我国の博物館事業が他の文化施設より発達が遅れた原因は、ここにあるともいえます。

昭和26年12月、初めて日本博物館法なる規則が公布され、その第2条に「博物館とは歴史・芸術・民俗・産業・自然科学に関する資料を収集し、保管（育成を含む）し、展示して教育的配慮のもとに一般公衆の利用に供しその教養、調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事業を行い、あわせてこれらの資料に関する調査研究することを目的とする機関云々

……」と規定されました。

これによって行政的に明確になったと同時に、従来の概念からすれば大きく変化しています。具体的に主なものを拾ってみますと、従来の概念では博物館は保管所という意味が強かったのですが、この規則によって目的と機能をもつ「機関」という考え方に変わりました。次に資料の範囲が拡大し、標本とか無生物といったものばかりではなく、動物園・植物園・水族館・自然園など生物関係も含まれることになったことです。

京都市動物園も施設としての基準に照らして、昭和27年4月にこの法律に基づいて文部省より博物館のひとつとして指定を受けました。ここで動物園の役割について少しふれてみます。

動物園は健全なレクリエーションの場であるばかりではなく、世界の珍しい動物を見物しているうちに、自然科学の勉強にもなるといったところです。また一方では、種々の動物に関する科学的調査や研究を行い、飼育や繁殖に成功するよう努力しています。

こういった技術が自然保護の重要性を叫ばれている今日、減少しつつある動物保護にも役立っています。例えば豊岡に昔から生息しているニホンコウノトリや、佐渡にいるトキなど特別天然記念物に指定して保護していますが、その生息数が減少してきて絶滅寸前といった状況になっています。日本動物園水族館協会では、コウノトリについては近畿ブロックの動物園が担当し、トキについては関東ブロックの動物園が担当するよう分担をきめて、地元の保存会の人々と協力して対策を講じています。またニホンカモシカは、高山獣で低地では夏季の飼育が困難といわれていましたが、当園では人工飼料で昭和30年から実験して居り、昭和42年には繁殖にも成功しています。

以上のようなことで動物園は生きた動物の博物館といえることができます。然し博物館施設の中に動物園も含まれているということは、一部のみに知られているだけというのが現状です。

この週間によせて博物館と動物園の関係について申し上げます。



見あきない猿ガ島

動物園のほぼ中央に位置する「猿ガ島」。ここを訪れるお客さんは、みんなニコニコしながらサル達をみえています。おとなも子供も、日本人も外人さんも、シカメツラをしている人はひとりもいません。1時間余りもあきずにみている熱心な人もあります。

しばらく時間をかけてみてみると、はじめはただ何となく歩いたり走ったりしているようにみえていたサル達も、それぞれ個性があり、目的をもって動いていることがわかります。まわりにいるサル達を気にしながら上を向いて、お客さんが投げしてくれるビスケットを待っているサル。イノシシを自動車がわりにドライブを楽しんでいるサル。悲鳴をあげながら一目散に逃げているサル。その後を追いかけている2~3頭のサル。騒ぎを聞きつけて岩のてっぺんからゆっくりと、落ちつきはらって下りてきたシッポをたてているサル。すみっこでは、この騒ぎには無関心をよそおいながらもチラチラと目をそちらに走らせつつ、溝の下流でエサをひろっているサル……。

これからお話するのは、このシッポをたてているサル——彼の名前はコウタロー君といいます——をボスにいただく猿ガ島のできごとです。



ヨツチヤンのドライブ

サル社会のルール

コウタロー君は猿ガ島のボスです。ボスといえば何

お山の大將は

コウタロー

だかギャングの親玉のような感じがしますが、一番の権力者、という意味です。われわれ人間社会でいうと誰にあたるのだろう、などと考えないでください。かえってわからなくなるといいますので……。

コウタロー君が他のサル達と一緒に猿ガ島にやってきたのは、2年前の昭和45年でした。それ以前には別のサル達がここにいたのですが、恐るべき人間の伝染病がはびこってしまい、ついに壊滅してしまいました。人間の伝染病、それは結核です。結核がどうして猿ガ島にうつったのか疑問に思われるかもしれませんが、それは簡単です。お客さんが猿ガ島にタンヤツバをはいたり、食べかけの菓子を投げたりするからです。

コウタロー君たちはアカゲザルという種類です。パキスタンから送られてきました。京都についた時には、ほとんどのものがまだみんな子供で、サル社会のルールやしきたりをよく知らないものが多く、そのために、けんかがたえませんでした。コンマ嬢は中でも最もあわれな犠牲者で、ルールを全くしなかったために仲間にも咬みつかれ、けがばかりしていました。

サルの社会では、強いものが好きな食物を十分に食べ、弱いものは、強いものが食べ残したあとを食べます。お客さんがピーナツを投げ、ちようど待っていたサルの近くへ落ちて、そのサルは横を向いて関心のないような顔をしていることがあります。「アレっ、ほしくないのかな？」と思っていると、どこからともなく別のサルがあらわれてゆうゆうとそれを拾い、口に放りこむと再びどこかへ消えてゆきます。待っていたサルは、彼の姿が見えなくなると、あわててその場所にゆき、残りものがないかと探し、ないとわかればまた餌をねだります。この様子をみていたお客さんは可愛そうに思い、また餌を投げますが何回投げても同じことのくり返しで、横どりするサルに腹をたてています。

しかし、これはサル達にとり、大変大事な場面なのです。強いサルがおいしい餌を十分に食べることは、強い個体が栄え、弱い個体は淘汰される方向に向っているのです。強い個体が十分に餌をとって繁殖にあず

かることは、その種(この場合はアカゲザルという種)がますます栄えることになります。もし間違えて弱いサルが先に餌に手をだすと、容赦なく制裁をうけます。このようにして、サルとサルとの間には強弱の順位が決まっているのです。お客さんがピーナツを投げたとき、AというサルよりBというサルの方が先にピーナツをとれば、BはAより順位が上であるといえます。この方法を全てのサルについて行えば、サル間の順位がはっきりします。これは、野生ザルの群れ構造を解明するときに行なわれる方法の1つです。

名まえと目じるし

コウタロー君やコンマ嬢のように、猿ガ島のサルにはみんな名前がついています。キンタロー、クロタロー、モコ、ジャレ、マリリン、シゲ、チャイ……。



名前をつけておく管理をする上で大変便利です。マリリンが赤ん坊をうんだ、とか、キンタローはクロタローにいじめられてけがをしたなどといえば、すぐにわかるからです。しかし、サルの中にはよく似ている

ものもいますし、思い違いをすることもあります。サルの戸籍簿を作る上で、人間がうっかり間違えたばかりに、とんでもない記録ができたりすると、サル達に対しても申し訳がないので、名前の他にもっと確かな目印がつけてあります。上の写真をみてください。これはヤスタロー君というサルですが、胸の白いところにひらがなの「く」を鏡でうつしたような記号がついているのがみえますか。動物園の「かくし文字」です。下の図をみてください。記号と数字を示してあります。これにより、ヤスタロー君は9番であることがわかります。これのくみ合せにより、1頭ずつ番号をつけて記録をとると、正確なものができます。消えたり、はがれたりしないように、1頭ずつ麻酔をかけて、入れずみをしています。



飼育下のひずみ

昨年の6月12日、おタキさんは猿ガ島で第1号の子

供をうみました。ところが翌日の13日朝、子供は頭を何物かにかみくだかれて、無残にも死んでいました。同じ日、チャイさんも赤ん坊をうみました。犯人は再び同じことをくり返すのではないかと考えて、交代で観察していました。それは午後4時半頃でした。突然1頭のオスザルがチャイさんに近よったかと思うといきなり子供を奪いとり、頭を「ガブリ」とひとかみし、山の頂上近くから下へ投げつけてしまいました。ほんの一瞬のできごとでした。みていた私たちは、あまりの驚きに、言葉にもならず、ぼう然と立っているだけでした。ようやく我にかえった1人が、投げつけられた赤ん坊を拾いに走りました。かすかに息をしています。レントゲンをとりますと、頭の骨が大きくずれています。可愛そうですがまづ絶望です。しかし、息がある間は誰かが母親代りにならなければなりません。Y君がそれを担当しました。彼は悪戦苦闘をしながらも見事にこの子供を育てあげ、つい最近まで「おとぎのくに」のマスコットとして活躍していました。

この事件の犯人は、意外にも、群れの統率者、コウタロー君だったのです。翌日、コウタロー君は、猿ガ島から他へ移されました。まだ他にも出産をひかえているサルがいたので、出産シーズンが終るまで、しばらく頭を冷してもらうことになったのです。

今年のシーズンも、事件は続きました。チャイさんは3月17日に子供をうみました。1週間後の3月24日朝、彼女は赤ん坊を2頭も抱えているのです。よくみると、アカメさんがそばでウロウロしています。うんだとたんに、チャイさんにとられてしまったものと思えます。このような誘拐事件は、その後もありました。おタキさんが、自分の子供の他にモコ子さんの子供もとり上げて、抱いていたのです。

野生の群れでは、普通、このような事件はおきません。こういうことをくり返していると、アカゲザルという種が減ってしまうからです。これは、飼育下でのひずみであろうと考えます。ひずみを生じた原因、それは先ず、2年前に入れたサル達がみんなあまりに若すぎたからだろうと思います。野生でも飼育下でも、群れで生活している時には、赤ん坊から一人前に育ていく過程で、いろいろなことを学びます。他のメスが子供をうみ、抱いてミルクを与える様子も、じっとみておぼえるのです。猿ガ島のサル達は、そういう教育がまだ十分になされていない幼ない段階で京都にやってきたため、大混乱に陥ってしまったのだと思います。

コウタロー君はボスらしく、そしてメスザル達は母親らしく成長してくれることを願っています。

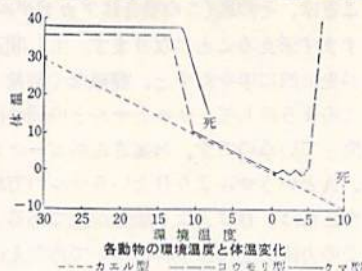
(K.Y.)

動物豆知識

『冬眠』

*天高く馬肥ゆる秋。は動物にとって、これから訪れくる試練「厳寒」に対して、冬毛・冬羽への衣がえ・有効な防寒着となる皮下脂肪の蓄積などの準備に忙しい時です。これらの用意を終えた動物の中には、外界から隔絶された地中や洞穴に入りこみ「冬眠」をするものがあります。奇妙な現象として古くから注目され、多くの研究がなされましたが、大がかりな手術の際使われる低温麻酔もこの冬眠の生理からヒントを得たものです。外気温の低下にともない呼吸や血液循環などの生理機能を停止・低下させ仮死状態となり、秋に貯えた皮下脂肪をエネルギー源として生きのびる、すなわち鳥の渡り同様寒さに対する一種の逃避適応といえます。種類によって冬眠の状態は違いますが、体温の変化によって「カエル型」「コウモリ型」「クマ型」の三種類に大別されます。最初の型はハ虫類以下の変温動物にみられ、外温の低下にしたがって体温も低下し、どのような刺激を与えても夏期のような活動を行うことができ

ません。
コウモリ
やヤマネ
など定温
動物とさ
れている
哺乳類の
一部にみ



られる型では、体温が外温とともに低下しますが、ある温度以下になると体温は逆に上昇し、ついにははめざめてしまいます。このことは凍死を防ぐためにも重要で、ヤマネでは0.67°Cが最低体温といわれています。クマ型では体温がさほど低下せず、うつらうつら眠って冬を越すと表現した方が適切なようです。なお動物園で飼育しているクマには本格的な冬眠はないようです。

冬眠の条件として、外温の低下・食物の不足だけでなく外界からの刺激(光・音)を一切絶つことも必要とされています。このことを考えた時、家庭で飼っているカメなど餌をたべないまま放置しておくことは危険で、むしろヒーターを使用し、高水温を保持しながら夏期同様に餌を与えることが安全な冬越しの方法といえます。(I.K.)

できごと

8月1日～7日

この1週間は動物園週間で、小学生4・5・6年を対象にしたサマースクールや、ガイドツアー(園内案内)を行ないました。サマースクールには3日間で計103名の参加者があり、盛会でした。

8月11日

前号でお知らせした抱卵中のホオジロカンムリヅルは、3個の内1個を孵化させました。このヒナは翌日親から離し、人の手で育てています。親より人間の方がうまく育てられるからです。

8月28日

新しく来園したトラの愛称を募集していましたが、オスはゴンタ、メスはミミと決定しました。名づけ親は次の方々です。

ゴンタ……高野中学校2年・酒井明義君
ミミ……深草小学校1年・安藤寛子さん

8月31日

昨年の9月22日に生まれたキリンの子供(オス)を、

伊豆のシャボテン公園動物園へ送りました。たくましいオスに育ってくれるように願っています。

9月17日

田中関田町近くの人家の屋根に見えないトリがいる、との連絡をうけみにいったところ、ウミネコが1羽チョコンと立っていました。台風20号のとばっちりを受けたようで、飛べそうになく、動物園で保護しました。

9月19日

特別天然記念物ニホンカモシカが出産しました。子供はオスです。夏をすぎてからの出産例は今までになく、順調に育ってくれるかどうか気がかりです。

9月28日

沖縄のコザ市にある「子供の国」へタヌキを7頭贈りました。全て当園で繁殖したものです。

夜間の気温が下がってきたので、この日からゴリラの子供たちの部屋に温風機をつけました。みなさんもカゼに御用心!

■ 第3号の発行は、48年1月1日の予定です ■